『黒い雨』を読んで

弘前大学教育学部附属中学校　花田萌維

対象作品／井伏鱒二著『黒い雨』新潮社

「正義の戦争より不正義の平和のほうがいい」

この重松の言葉はどれほど重いものだったか。本を閉じ終えた後にも重く深く私の心に残っていた。

私は、この『黒い雨』を読み、戦争や原爆が奪ったものは、人の命だけではないということに気づかされた。戦争は、一人一人の未来の選択肢をも奪っていることが分かった。戦争を乗り越え、生きることができたとしても、その先に待っているのは、決して幸せな未来ではないと思った。本来は、手に入るはずの幸せですらも手に入らない状況にまで追いこまれた人々が多くいるということを知ることができた。

その理由は、この物語から当時の状況がよく伝わってくるからだと思う。その一例として、実際の戦争の人々の様子が挙げられる。擬態語や比喩を用いているため、私は、当時の様子を容易に想像することができた。実際の戦争を見たままの直接的な言葉で表現することにより、「原爆に対する危機感」や「戦争の恐ろしさ」という単調な言葉では言い表せない底知れぬ恐怖、そして、悲しみがひしひしと伝わってきた。それに加え、〝無知〟とはいかに恐ろしいものかが伝わってきた。黒い雨についてよく知らなかったために、黒い雨に対する安易な考えがあったと思う。それは、本書中の「黒い雨のことを人に話しても、毒素があることは誰も知らんので誤解されなんだでしょう」という文から伝わってくる。また、黒い雨が人々、世間の間でよく知られていなかったがために、異常すぎるほどの偏見の目が被爆者に向けられていたことは、重松の姪である矢須子を通して、よく伝わってきた。このように、人々の身体だけでなく、心にも、治ることのない深い傷をつけ、底知れぬ恐怖感を人々に植え付けたものが原爆、そして、戦争なのだと思った。

また、本書中に「どうしてピカドンが落ちる前に降伏することが出来なかったのか」と重松が語っていたが、これは重松のみならず、多くの人々が思い、願っていたことだと思う。私は、実際に原爆というものを体験していないが、本書を

読むことにより、以前よりもこのような言葉により強い共感を得ることができた。また、この言葉に人々は続けて、「もう負けていることは敵にも分かっていた筈だ。ピカドンを落とす必要はなかっただろう。」と語っていた。この言葉には、敵に対する嫌悪感だけでなく、遣る瀬ない悲しみや怒りも込められていたと思う。

本書では、〝戦争〟の恐ろしさを平凡な市民の視点から考えることができる。それ故、共感できる部分も多くあった。私は、この本を通し、〝戦争〟というものをよく理解する必要があると思った。〝戦争〟は良くないということは、世界的にも多くの人々が思っていると思う。しかし、今日〝戦争〟という殺人が起こり、再び〝戦争〟の〝悲劇〟がくり返されようとしている。実際に今、ロシアがウクライナに侵攻し、多くの人々が深い悲しみの中にいる。多くの人々が自国の〝正義〟を背負い戦っている。私は、それぞれの国が異なる〝正義感〟を持ち、すれ違いを起こしてしまうことは仕方がないことだと思う。だが、それを理由に、力を行使し、お互いを傷つけあって物事を解決しようとすることは、許されない行為だと思う。〝戦争〟を行わずとも解決する方法は必ずあったはずだ。また、〝戦争〟を起こす前に、〝戦争〟がどういうものなのかを考えなおす時間はあったと思う。第一に、〝戦争〟のことをよく理解していれば、〝戦争〟を起こす気になどなれないはずだ。だからこそ、一人一人が〝戦争〟を〝恐ろしいもの〟という単調的な言葉で終わらせずに、〝戦争〟をきちんと理解し、二度と起こさせないという強い意志を持つことが大切だと思った。